

# 「樺太酋長バフンケ」の<sup>されこうべ</sup>髑髏、遺族への返還なるか

井上 絃一

## 北大への遺骨返還請求

往時には邦領南樺太東海岸のバフンケ酋長として知られた木村愛吉氏の髑髏が、北大医学部収蔵の人骨資料中に見出されるとの情報は、『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』(2013.3)\*で初めて公開されました。但し同書はそれを人骨 943 号(相浜 1)と記すのみで、木村愛吉氏の遺骨とは明記していません。とはいえ、エンチュ(樺太アイヌ)人骨 71 体中で「個人特定可能」と特記されるのは「相浜 1」だけで、児玉作左衛門北大教授が 1936 年 8 月に東海岸の相浜で発掘した「頭骨」と記載されています。しかも北大収蔵アイヌ人骨としては、二人のアイヌ著名人(「日高酋長ペンリユウ[平村ペンリウク]」と「樺太酋長バフンケ」)が言及されています。そこで私は 2016 年 4 月、同大学の「アイヌ遺骨等返還室」に対し「相浜 1」と「バフンケの髑髏」の同一確認を求めましたが、私の申し入れは個人情報保護を口実に峻拒されました。

その後、横浜の木村和保氏は 2017 年 4 月、祖母チュフサンマの叔父に当たる木村愛吉氏の遺骨返還請求書を北大に提出しました。和保氏はブニスワフ・ピウスツキの一人息子助造氏の唯一のご子息ですから、それは日本におけるピウスツキ家の問題でもあります。

アイヌ遺骨等返還室は 7 月 6 日付で木村和保氏を遺族の一人と認め、7 月 14 日から 1 年の公示期間中に他の遺族からの請求がなければ返還交渉に着手するとの段取りを通達しました。つまり、正式の返還は 2018 年 7 月 14 日以降に決定されるわけです。とはいえ、平取の平村ペンリウク氏の事例では、返還交渉が軌道に乗り出したところで平村氏の遺骨ではないとしてキャンセルされただけに、本件の成否は今なお予断を許しません。

## 木村愛吉(バフンケ)氏の生涯

木村愛吉氏(1856-1920)は樺太東海岸小田寒の出身。明治初年にアイ・コタン(相濱)に居を構えて以来半世紀にわたりエンチュ有力者として活躍し、1920 年に相濱で没しました。ロシア時代末期にはロシア人や日本人の漁業者に伍して 2 漁場を賃借、資本主義的経営の漁業を起業して蓄財に努め、ペチカの備わるロシア式丸太小屋まで建てています。「樺太でも有名な暖かい家」とされる同宅にはピウスツキが寄寓し(1902-1905)、姪のチュフサンマと恋仲になって結婚に至りました。当時のチュフサンマは父シレクア(愛吉氏の兄)とともに、隣

接するアイヌ式住宅(チセ)で暮らしていたようです。

50 代の愛吉氏と直に接した松川木公は彼を「容貌頗る魁偉、身の丈は六尺五寸に餘る大男、風貌は「動物園の獅子」さながら(松川『樺太探検記』1909)と、石田収蔵は「巧みに邦語を談じ、露語に通じ、外交に敏」(青山『極北の別天地』1918)と評し、青山東園はロシアの文豪トルストイやゴーリキー、千徳太郎治は西郷南洲になぞらえていました。因みに、ピウスツキの撮影した写真に収まる瘦身の愛吉氏(写真 1)から 197 センチ超の巨漢を想像できる人は稀でしょう。日露戦争最末期の 1905 年 9 月 3 日、南部樺太占領軍の太秦供康支隊長はポリシヨエ・タコエ(大谷)で「バフンケ酋長」と別れの杯を交わした際のスケッチを「樺太出征日誌」に残しています(写真 2)。写真 1 とほぼ同年代の愛吉氏の風貌は、やや端麗に過ぎるとはいえ、松川らの記述とも矛盾せぬように思われます。

樺太庁は 1921 年、東海岸中部の 10 コタン(北から南へ、オハコタン/箱田、マヌエ/眞縫、シララカ/白浦、オタサン/小田寒、アイ/相濱、ナイブチ/内淵、サカヤマ/榮濱、ルレ/魯禮、シヤンチャ/落合、タコエ/大谷)の住民を集住させるべく白濱村を建設しました。総移住が開始された 8 月 1 日には村長以下 9 名の村議(あるいは評議員)からなる村の統治機構が整備され、村長には魯禮部落総代だった内藤勘太郎、そして残る 9 コタンの部落総代が村議に就任します。例えば大谷熊吉(チュフサンマの娘キヨの夫)は、大谷の前部落総代として村議を務めました。こうして 10 コタンは廃村となりますが、旧村にあった墓地は恐らくその後も踏襲されたものと推定されます。

愛吉氏は 2 度の妻帯歴にもかかわらず、いずれの配偶者も子宝には恵まれず、養子の男子親族レーヘコロ(1890-1930 年代後半、日本名木村愛助)に資産を相続させました。千徳太郎治によると邦領時代の愛吉氏は、その「露西亜式の大建物」(丸太小屋)が樺太庁から驛逋に指定され「相川渡船を兼ねて営業し」「部落總代等の公務にも就かれ、公衆の爲め盡くされ」そしてこの「大建物」では旅籠屋を営んだとも伝えられますが、愛吉氏の没後に「二代目の愛助が此の家を他人に賣却して仕舞つた」(千徳『樺太アイヌ叢話』1929)そうです。木村愛吉一族は日本統治下で次第に没落してゆき断絶したらしく、愛助氏の子孫に関する情報は不詳です。愛吉氏が 1921 年の白濱集住を待つことなく、その前年に亡くなったのは却って仕合せだったかも知れません。

2018年1月10日には拙訳編書『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』が東北アジア研究センター叢書第63号として上梓されます。同書はピウスツキの樺太島にかかわる人類学的労作11篇の邦訳と、参考論文として拙稿「樺太島におけるチュフサンマとその家族」も収録しています。本稿で紹介する木村愛吉関連情報は同論文から抜粋しました。詳しくは同書をご覧ください(非売品ですが、国内外の主要な大学図書館に寄贈されます)。

上記拙稿で本件に直接かかわる「エピローグ」から、最末尾の一節を以下に転載します。

(北海道)大学の「アイヌ遺骨等返還室」は木村氏の請求を審査し、近い将来には、「バフンケ頭骨」を正統な遺族に返還するか否かを決定するであろう。その回答がいずれであれ、北海道大学は以下の設問に対し、誠実に答える責務を負っている。

- (1)一九二〇年の埋葬後十六年しか経っていない木村愛吉の墓は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で、果たしてどのように、何故、また誰によって、暴かれることになったのか。
- (2)「相濱1」が木村愛吉に帰属することを立証する議論の余地のない根拠は何か。「樺太酋長バフンケ」

なる名称が、他の七十体のエンチウ遺骨とは違って、例外的に記録されえたのは何故か。

- (3)北海道大学は木村愛吉の頭蓋骨取得以降八十一年の長きにわたって、その存在を学外、なかんずく彼の子孫へ向けて発信することを怠ってきたのは何故か。

(いのうえ・こういち、北大名誉教授、2017.10.25)

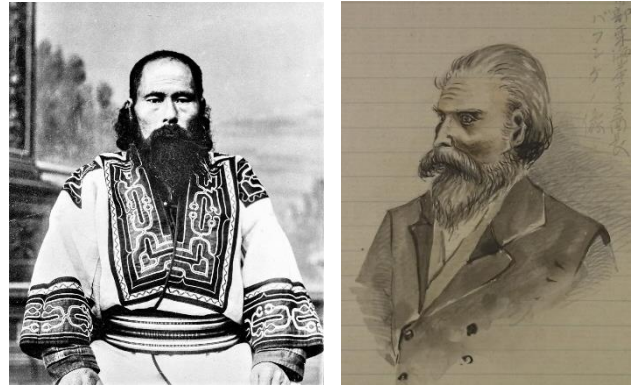


写真1(左)ピウスツキ撮影の木村愛吉氏(1902-1905)  
この人物を初めてバフンケと断じたのはサハリン州郷土博物館のM・M・プロコフィエフ氏。その経緯と論証に関しては上記拙稿(注五、三〇)を参照。

写真2(右)南部東海岸アイヌ酋長 / バフンケノ像(北海道博物館所蔵手稿、太秦供康「明治三十八年 樺太出征日誌」より)

NHK《ラジオ深夜便》より

## ポーランドの住所表記

岡崎 恒夫



留学から帰ってきた教え子がしばしば日本の住所を探すのには骨が折れるといいます。今でこそGPSを頼りに探せばさほど難しくないのですが、日本の住所表示のシステムはわかりにくいようです。

日本では〇〇県〇〇市〇〇町〇〇丁目〇〇番地という風に表し、大きい行政区から小さい方に向かって書きます。ところがポーランドでは先ず通りの名前、その次は建物の番号があって最後にアパートの番号が来ます。その次に市の名前が来ますが、県名は書きません。そのシステムは非常にわかりやすく、初めて訪ねる場合でも、どこにその通りがあるかを知っていれば(もちろん地図にはそれが記されています)容易に建物にたどり着くことができます。日本の行政単位は県から町までは面ですが、ポーランドのそれは市以下が線(〇〇通り)になります。

例を挙げましょう。日本では〇〇町の中に〇〇丁目がパッチワークのように張り付いています。例えば1丁目の側に2丁目がありますが、それが上下にあるのか左右にあるのかわかりません。したがって1丁目の右に2丁目があり、左に5丁目があ

るという事態が生じます。ポーランドの場合はこの丁目に当たるのが通りで、すべて線で表されます。つまり、その町に存在するすべての通りに名前が付けられているのです。そしてその通りに沿った建物の番号は、町を流れる川に平行して走っている通りの最も小さい「1番」がその川の上流から始まります。完全に平行でなくて少しぐらゐ角度がついていても同じ原則です。次に川と直角に走っている通りは、川に最も近いところから1番が始まり、川から遠のくにつれてその番号が増えていきます。そして、道の片側は奇数番号、反対側は偶数番号が振られています。

ここまで聞いて皆さんは、では一体通りの名前はどうかになっているのかと思われることでしょう。そこで、ポーランド最大の都市ワルシャワの通り名を数えてみたら、4,000をちょっと上回る数でした。と言うことは他の町はこれよりもっと少ないと言うことです。市の道路局が、この4千もの名前を付けるのは大変だろうと思われるでしょう。お察しのとおり、名前を付けるのに相当苦勞した跡がうかがえます。従来の通